

苫東の雑木林で —雑木林の保育に学ぶもの—

苫小牧東部開発(株) ^{くさ} ^{かり} ^{たけし}
草刈 健
(1996. 10. 31 受理)

苫東の雑木林を育てる

苫東の雑木林はコナラを主としてできており、地形が平坦でササもほとんどないに等しいので、林内を自由に歩くことができる道内ではきわめて恵まれた地域であると言えます。それに大変美しいこともつけ加えておく必要があります。

苫東では人工林の手入れがひと区切りし、この雑木林の保育を始めて4シーズンが過ぎました。年間1ha前後の小面積でいわば細々とスタートしたのですが、発生材をシイタケのほだ木と薪炭材として利用しながら継続可能なひとつの手法として定着しつつあります。研究と呼べるような資料は引き出していませんが、こざっぱりした林が年々確実に増え、実在するという現実はなにかしら記念碑のような側面ももっているようだと思えるようになりました。「美しく」「楽しく」「胸ふくらむ」雑木林の散文的な魅力とともに保育の将来が見えかくれし、漠然とした展望もない訳ではありません。

ひとつの事例として苫東における保育の現状を個人的な感想とあわせて述べてみたいと思います。

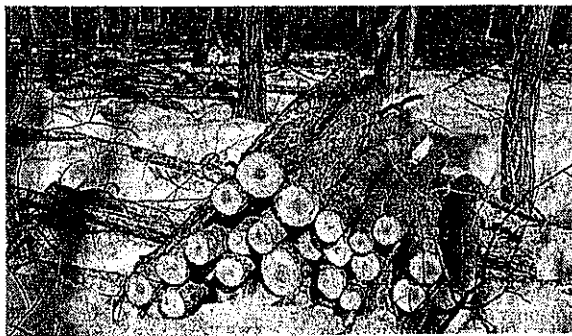


写真-1 間伐した林とその産物

保育の動機

苫小牧に住むようになって、わたしははっきりと若い雑木林の快適さと美しさに気づきました。雑木林の美しさに目覚める契機になったのは、苫東のつた森山林や北大苫小牧演習林、あるいは市

街地の北側に広がる丘陵の林であり、それらは少しばかりの恐れもともない五感をフルに働かせた徒歩の時間でした。国木田独歩が「武蔵野」に描いた雑木林の発見を追体験するのに似ていたかなと今となっては思い起こすことがあります。

雑木林の保育のきっかけはここにあったと思います。やがて十分に枝を伸ばしたコナラ本来の容姿にふれる機会が多くなるにつれ、これまで枯れるのにまかせていた萌芽林を若いうちにシェイプアップしておけばどんなに素晴らしい林ができるだろう、という願望も強くなってきました。平成元年からは苫東の中で樹高が10m程度のコナラやカシワの成木200本位を移植してきましたが、ランドスケープの素材として容姿にこだわると、樹木本来の容姿が見て取れるのは散生林の一本立ちした樹木たちがほとんどだったのです。こんなふうに各々の樹木が充分な空間を与えられると、林はどんな整った姿を見せるのか。萌芽2次林における早い時期の密度調整は、いささか使命感も伴って魅惑的なものに映って来ました。

さらにもうひとつつけ加えるならば、林の保育作業は本来レクリエーション的な要素をもっており、また1面では、園芸セラピーに似て心休まる何かしら癒される面ももっているのではないかと思います。林の密度管理を目的としながら、作業がそれ以外の副次的な働きもあわせもち、市民参加の受け皿にも十分なりうるのではないか。もしかすると林の保育は、一日の作業終了時に達成度が目に見えるので心理的効用ももっと評価しているのかも知れないと考えられるようになってきました。そして何より、育っていく姿を見守る至福も味わえるという訳です。

保育作業をする人、間伐された材を必要とする人、林の手入れをしたいができない人、時々林の手入れを手伝いたい人、のんびり散策したい人、そしてこの土地固有の雑木林に育てたい人などの様々な動機が、苫東の雑木林をステージにしてつ

ズンにはかなりの人々に利用されていたのではあるが、それを、関係者の合意のもとでいわば「どうぞ」と広報に踏み切ったのである。

公園などでは、ブッシュの刈り払いなど簡単な整備も進められ、柏原球場は、軟式の公式試合を行えるグレードにし、カップ争奪の大会が始まった。休憩室が欲しいという声のでたのを機会に、ログビルスクールを開いて職員と市民と一緒に学びながらダグラスファーのログハウスが完成した。

柏原の北の入り口では、職員が牧野風の手作り公園をつくり、カシワの牧柵がそれらしい雰囲気を出した。管理はややラフだが肩の凝らない牧場のような広場は、郊外である苫東方面へドライブしながら小さな子供を遊ばせる場所として少しずつ広まり、工業用地には珍しく女性と子供がたたずむエリアが生まれたのである。利用者の声をもとにハーブ園やトリムコースなどを増やし、わずか3haあまりの、それも鉄塔のそばの何もない牧草地がいつの間にか年間数千人が足を運ぶところになった。保全緑地の「つた森山林」も同じ時期に開放され、探鳥会や遠足なども行われるようになっていく。



牧場のようにのんびりできる広場

ひと気のない本物により近い自然を、このムードを快く思う人たちに開放することで、苫東の緑地とその周辺は人の住める風景に少しずつ変わっていった。苫東の緑地の開放は、大規模プロジェクトと称される苫東が、土地の利用のうえで地域と疎遠になっていなかったかと反省してみる契機にもなったが、結果的に、殺風景な原風景にひと気が増したのも事実である。

②ハスカップ採りの歴史

日常の労働を離れ、林に分け入って山菜やきの

こをとる行為は、昨今、人と林をつなぐ中心的なレクリエーションになっている。森や林との関わりには、落ち葉踏む音や森の雰囲気そのものに喜びを見いだす静的なものや、山菜などどちらかと言うと実利的なものと結ばれる収穫を目的としたものなどがある。ハスカップ採りは、高木の林ではなく灌木の中で行われる収穫型レクにあたる。

このハスカップ採りは近隣の人々と緑のつきあいではシンボリックなものと言える。土地の所有者の許可を得るでもなく、いわば共同所有の家庭菜園のような気分で、目当ての場所に車を止めてノゴマやオオジュリンの声を聞きながら実を摘むのである。特に密生するエリアは、一株ごとに周りが踏み固められとても歩きやすい。毎年毎年、繰り返し人々が入り込んできた歴史的な証といえる。

③郷土の樹木の再評価

郷土の樹木などを低く評価する傾向は私たちの心の中に眠っているのか、ここ苫小牧も郷土の樹木に少しばかり冷たい。だが、森の散策を充分楽しむためには、郷土の樹木を素直に受け入れられることも必要だと私は考える。

苫東では用地造成で残せないカシワなどをシンボルツリーとして保存していくとてとして、5~10mの成木の根回しと移植を行っている。カシワなどナラ類の成木移植については、数少ない文献をひもといても研究機関に尋ねてもあまり明るい見通しは得られず、おまけに土壌は火山灰で根鉢は簡単にくずれてしまう状態である。それでも試験的なものと割り切って移植を始めてみると、4年度まで100本以上移植して完全に枯れたのは5本ほどだった。

郷土樹種を再評価していこうという第一のねらいは、実は、移植を図って植生を組み直そうということではなくて、自らが郷土樹種を見直すとともに、そのまま雑木林全体を工場用地内に取り込んで本物の緑に囲まれた新しい今日的な生産環境を創るためである。私たちが郷土の樹木の良さを十分に評価し、胸を張って緑の環境を地の利とともにまるごと企業に譲る……。地方に企業を誘致するという現代の経済行為を多少民話風に言ってしまうえばそんな風になるのではないかと思う。

森づくり、緑地づくり

①森づくり

苫東アセスにおける緑地の多角的利用の計画の中には林業的利用ももちろん含まれており、やがては全体の施業や保全プランとともに具体化するだろう。ただ、その林業的利用というのも、一般民有林がそうであるように、植えて育てて木材を生産するというだけでは、今日、森づくりの直接的な動機づけとしては力が弱い。苫東の緑地の中の森づくりも、当面必要な管理を、用地買収の前後からまったく手入れがされなかったカラマツなど針葉樹人工林に限定してスタートした。しかし56年の15号台風では、140haのカラマツ林が風倒の被害を受け、そのうち保安林など約60haで復旧造林を行い、残りは風倒木を処理した後、天然更新にゆだねることとなった。

だが、苫東のもつ資質を生かした「緑豊かな工業基地」にこだわると、どうしても基地内に広汎に存在する天然生広葉樹林（以下「雑木林」）の魅力を引き出して育林方法と現況有姿型の造成に活路をつける必要がある。そのため折りにふれて沿道の雑木林の間伐を進めており、平成2年には通称「緑のトンネル」と呼ばれる、視察のめぬき通りの一部で間伐とまき芝をして、雑木林のキャンパスができたが、これはいわば現況有姿型のショウウィンドウにもなっている。



苫東版「緑のトンネル」

雑木林の手入れは、シイタケのほだ木生産とタイアップした作業方法の検討を行っている。5年3月に行った第1回目の試験的な間伐では、1haで、ほだ木（大小込み）1,050本、薪炭約13立方メートルを生産し、やや明るい見通しがついた。

この作業はあと2年間、間伐度合いの調査を続

け、作業箇所と放置した林分を林道の左右で比較しながら、「雑木林を育てるには伐採すること」という逆説を目で見てもらおう見本林になる予定である。そして、ザリッシュが提唱した森林美学や森林風致を応用問題として現場で進めていくステージが、働く人の憩う苫東の緑地でも始まったことを最も大きな喜びにしたいと思う。

また、林を育てる楽しみというのはほとんど忘れ去られた現代にあって、学校林や企業・市民グループの育林のフィールド、あるいは10年位をタームにした育林コンペなど、森を育てるプログラムは色々なふくらみをもつことができる。たとえば園芸療法というのがあるが、実は育林も精神衛生やレクリエートとしての有用性が高いのではないかと思われる。なぜなら、カラマツ林の枝うちを始めると止まらなくなるように、みるみる風景が美しくなっていく達成感、森の中の空気、そしてそれらが新緑や紅葉の時に見せる生まれ変わった素顔、小動物や山菜などの意外な発見……。ひよっとすると逆有償の時代がくるのではないかと空想するのである。

②リサイクルと切り株緑化

苫東が進めているいろいろな事業の中で最も地味で、しかし最も今日的なものがある。表土保全とリサイクルである。これは切土して用地を造成する場合に、表土をすきとってストックしたり、泥炭を貯留して火山灰に混入し緑化用の客土などとして利用するものである。もちろん、基地内の公園や工場で刈り込まれた芝などもこのリサイクルヤードに持ち込まれ、抜かれた切り株に付着した土もここである程度ふるい分けられる。

また、苫東では平成3年から道路建設時などに発生した各種の切り株を移植してきた結果、緑化手法のひとつとして注目することになった。切り株そのものは抜いて野積みしてしまうとただの産業廃棄物になってしまうが、緑化に再利用をする場合は「緑化エネルギーのかたまり」のようである。

③管理の工夫

切り株緑化の良さは、抜根を捨てる時にギブアンドテイクが生じること、根鉢にいろいろな郷土植物が混じること、などのメリットが挙げられる。何より萌芽枝の成長が早いので、少なくとも下刈は不要でメンテフリーになることも特色であ

る。ハスカップの原野や切り株の緑化、ドングリの播種などメンテフリーのゾーンと沿道の刈り込んだ芝および雑木林の混在は、これからも苫東の景観形成の柱のひとつである。

北大苫小牧演習林ほどの面積をもつ苫東の緑地の管理は、メリハリのあるものが自ずと求められるが、何より植栽にもその後の管理にも手のかからない方法を取り入れる必要がある。その際には、風倒跡地の天然更新などが必ずしも「手抜きで良くない」ものでないことは明確に評価しておきたいと思う。あるシンポジウムで近自然河川工法を語ったオーストリアの技術者が「この方が結果的に経済的だ」と明言したのが印象的だったが、日本では、公園・緑地と言うと営造物や新植に走りすぎ、ビオトープのような、安くてのんびりする「ありのまま」に重きが置かれないのは残念である。

森でくつろぐ心理

国木田独歩が欧州人の散策に共鳴し、武蔵野の雑木林を描いて100年ほどになるが、地形がゆるやかで歩き易く入りやすい里山の雑木林をあげるとすると、苫小牧のそれは道内の筆頭にあたると思う。苫小牧演習林で心を解放する市民が、マチの宝として演習林をあげるほどにまれな親密さが築かれてきたのは、自然な形で森との糸口を探ってきた石城林長やスタッフの力であり、その努力は苫小牧の雑木林などの資質をうまく引き出すことに注がれたのだと思う。

また、親しみを覚える林は、枝下が高く、入りやすいことや、「アメニティーに対する評価は立木本数が少なく、平均樹高が高いほど高まる」²⁾ということを経験的に了解する人は少なくないと思われる。個人的にはササがないためにやや遠くまで見通せることは、心を解放するうえで大事なカギのひとつではないかと考えてきた。クマと会いそうな緊張感から解放たれて、逆に時折人と会うやすらぎというものもある訳で、「人とあまり会いたくないがときどき会いたい」というジレンマは、クマとすみわける私たちが森の散策でひそかに望むことだ。

そういう意味では、苫東は支笏湖周辺などの大森林帯とはかけ離れたエリアになっているので、エゾシカとはよく会うがクマと出会う心配はまず

ない。苫東の緑でくつろぐ人の口から「安心」という言葉が聞かれるのもそんな心理を反映しているのだと思う。

森を散策する静的な楽しみが、私たちの多くに楽しまれているという状態にはまだ遠いと思われるが、ライフスタイルの変容の中で、楽しめる感性を自分のものにしていくことになると考えられる。

おわりに

市民やここで働く人と苫東の緑は、やはりその時々たくぐみのなかで自在に動いていこうと思う。言葉としてはいささか陳腐になってしまったインダストリアルパークだが、高度に規制されながら美しく、地域に開放されるという要件はこれからも色あせないテーマであり、むしろ最も欠けてしまいがちな課題だといえるだろう。

国営公園として名高い昭和記念公園が、かつてそこが市民のトンボとりや野原の遊び場だったことを考慮すると必ずしも新しい営造物緑地を高く評価できない、という意見もあるようだ。苫東の緑地についても、とかくハコモノとしての公園づくりを指向する傾向があるが、働きながらレクリエートすることや緑の保全を考え合わせると、個人的にはこれから型の緑地の資質としては現況で充分だとするスタンスも重要だと考える。時がたつて、周辺が人工の生産施設などでにぎやかになったとき、多様な植生をもつ苫東緑地は、関東の今の「雑木林」へと自ずとシフトするのではないかと思う。

参考文献

- 1) 石城謙吉：「北海道大学苫小牧演習林—現代の里山をめざして」
- 2) 佐藤 創(1990)：「林相による森のアメニティーの違い」
光珠内季報 No.79 1990. 5

(苫小牧東部開発(株))